

ほど近く。亡くなった児童もいる気仙小学校の目の前であった。

奈良からバスで14時間、陸前高田市までまた2時間。狭いバスの中で過ごしていたから、疲れているはずなのに、不思議と疲れは感じなかった。

普通では考えられない高所の木の枝に、未だに引っ掛かったままの衣類や布団のその下で、まずは家屋跡の除草作業を行った。

除草をしていくにつれ見えてくる日用品などの数々。やかん、調味料、CD、本…。そこに家があったと分かるものは、家の基礎くらいだけだけれど、今でもそこで生活をする人の姿が見えるような、それくらい多くの日用品が、草に埋もれ、土に埋もれていた。皆で力を合わせて草を刈り、そこからいよいよ瓦礫の撤去である。釘が飛び出し、タイルがついたままの壁の一部や木片を一つ一つ手作業で運んで行く。

雨が徐々にひどくなっていく。被っていた帽子は雨を含んで重たくなる。つけていたマスクに汗が溜まる。釘や木の端があたり、レインコートは破れていく。手袋もレインコートも泥だらけになっていく。でも、疲れは感じなかった。あの惨憺たる状況を目にして、被災者の方々の心境を思うと、私達がどうにかしなければという思いで一杯になり、それが疲れを上回っていたのだろう。おそらく、ボランティアに行った生徒全員、同じことを思っていたのではないだろうか。

そんな時にふと見つけた文字「こわしてください」残された家の基礎の部分に書かれていた。どういう思いでこの文字を書いたのだろう。今まで住み続けた家が流され、基礎だけしか残っていない、思い出のものもなくなってしまった。そんな状況の中で、「こわしてください」胸が痛かった。苦しかった。見ていられなかった。しかしそれと同時に、やはり私達が頑張らなければ。少しでも被災者の方々の力にならなければ。という思いが強くなった。

けれども、思いが強くなっていくにつれて悲しいかな、雨の勢いも激しくなる。さあこれからだ、と思っていた矢先、警報が付近で発令されて、予定より2時間ほど早く作業が終わった。残念だったが仕方がない。明日もしっかり頑張ろう。と、そう心に誓ってボランティア現場を後にした。

翌朝、前日と同じように、バスで2時間、陸前高田市のボランティアセンターまで。そこでボランティアスタッフが言った一言。「昨日も遺骨が発見されました。」まだ見つかるのか、海に流された、ということではなく、瓦礫の下敷きになったまま発見されていない遺体がまだあるのか、と。やはり、「震災はまだ終わっていない。」改めてそう感じた瞬間だった。

それから、前日に作業をした場所の奥にある、林の斜面周辺の大きな瓦礫の撤去が私達の担当になり、早速作業に取り掛かった。前日とまではいかないものの、小雨のそぼ降中である。

作業をしている最中、木立の中に白いものが見える。何かと思い近づくと、車体の側面を地面につけ、運転席の扉が開いたままの軽自動車横たわっていた。車内には泥が溜まっていて、手提げ鞆がシートに引っ掛かったままになっていた。普通では考えられない場所である。その様子を見た時、声が出なかった。しかし、目を離さずにはいられなかった。

その日の作業は14時までしっかりやり終え、林の斜面もきれいになった。

まだまだ働きたい。やりたい思いが溢れてきた。ボランティアに行った生徒、私も含めて皆が口にした言葉だった。だが、作業は2日間。残りは後発隊に任せたと、私達はボランティア現場を後にした。

本当に惨憺たる状況で、震災はまだ終わっていなかったが、しかし、希望の光は見出すことができた。瓦礫の中で目一杯に空に向かって咲くひまわり、道中に見つけたプレハブづくりの「復興の湯」と書かれた銭湯、高田松原の希望の松、ボランティアセンターで風に揺れていた「がんばっぺ陸高」「なじよにがすっぺ」と書かれた風鈴。こんな希望の光がこれからも増えていくことを願っている。

今回の震災復興ボランティアに参加し、あらゆることに接して、考えさせられた。行く前まで、テ

テレビで流れる映像をただ眺めているにすぎなかったけれど、行ってからはその背景にある、人々の悲しみと努力と復興を夢見る希望とが共に浮かぶようになった。

また、共にボランティア作業に従事し、共に汗を流した仲間とも、今なお交流を続けている。それくらいに友情を深めることもできた。

私の人生の中で、これほどまでの経験はないだろうと思うくらいに影響を与えてくれた4日間であった。

また、この経験は、被災県以外の人間として、こちらで何かできることはないか、ということを考える材料にもなった。そして、しっかりとそれらをもとに考えて、学校、生徒会を基軸に支援をしていきたい。例えば、ボランティア作業中に、近くにいた他団体の学生が、釘の踏み抜きで怪我をしていた。そのようなことから、ボランティアへの支援も必要ではないかと思う。現地はまだまだボランティアの力が必要である。しかし、釘の踏み抜きや、ボランティアセンターのトイレも仮設トイレ、水も川の水を使っている状況では、個人のボランティアには厳しいだろう。そこで、セーフティーツール入りの長靴をボランティアセンターに寄付するというようなことも考えていきたい。

最後に、被災地の早期の復旧、復興を願い、この感想文を書き終えたい。

「東日本大震災被災地支援」に関するボランティア活動に参加して

県立桜井高等学校 2年 佐野 瑞希

私は、実際に現地に行って、復興の手助けをしたいと思ったのと、テレビで放送されている映像や新聞などで間接的に見るだけでなく直接自分の目で今、被災地はどのような状況なのか見たいと思って今回ボランティアに参加しました。

ボランティア1日目の午前中は、気仙沼の今の状況を歩きながら見学させてもらいました。だんだん海に近くなっていくほど、景色は殺風景になっていきました。地元の方が、ここは、津波がくる前は商店街だったんだよと教えてくださったところにはガレキ以外に何もなくて、焼け野原みたいでした。本当にここは私の住んでいる国と同じ国なのかと思うほど凄まじい光景でした。その凄まじい光景にただ広がっているたくさんのガレキは、被災していない私たちにとってはガレキにしか見えないかもしれないけど、被災者のみなさんにとってはガレキなんかじゃなく、それは大好きな町のカケラであり、過ごしてきた家のカケラであり、思い出のカケラでもあるんだと感じました。午後からは記憶の町という気仙沼の津波の前の状況を模型で再現する作業をしました。模型の中での気仙沼は、午前中に見学させてもらった町とは全然違って、今にも誰かの声が聞こえそうなほど、たくさんの家や建物がありました。こんなにたくさんの家や建物があったのに津波は一瞬でそれを奪ってしまったんだと思うとすごく怖いなと思いました。2日目は漁に使う網にからまっている釣り針などを取る作業をしました。作業をやってもやっても、なかなか終わりが見えてこなかったのが正直しんどかったです。でも、被災者の方々は、ずっとしんどい思いをしているのかと思うと、私がここで、くたばっていたらダメだなと思って、一生懸命がんばりました。最後の方になると網もどんどん片づいてきて達成感がありました。そして帰ろうと思ったときに、震度5弱の地震がありました。津波注意報のサイレンが響きわたって、もし津波がきたらどうしようということで頭がいっぱいになってしまいました。でも津波はこず、無事に目的地に着いたときはすごく安心しました。

私は現地で過ごした2日間でテレビや新聞ではわからないことをいっぱい感じました。余震や津波の恐怖、海沿いのガレキに近づくほど強くなる鼻をつくようなニオイ、どれも現地に行かないと感じられないことです。この震災をいつまでも私たちの頭の中に記憶として残っていくように、私はこのボランティアに行って感じたことを、文化祭や講演会などでいろいろな人に知ってもらいたい。

東北ボランティアに参加して

県立生駒高等学校 3年 丸山 大輝

東北ボランティアが募集された時は「もし、人のためにできることが、自分に何かあるなら」という気持ちで望んでいたが、それと同時にたくさんの不安もあった。例えば、自分が軽い気持ちで使った言葉が東北の方の気持ちを傷つけてしまうのではないだろうか。例えば、ボランティアの経験があまりに少ない自分なんかが行っても、足を引っ張ってしまうだけなのではないだろうかなど、とても悩んでいた。それでも、自分のやれることを100パーセントやり抜きたいという気持ちは、持ち続けようと思った。

ボランティアの当日、あまりの光景を見て混乱した。その視界の隅から隅までが空白に見えた。広大に広がる空白のすべては、もともとは家があったらしい。今でもその景色が浮かびあがる。なぜか、恐怖すら感じられなかった。

ボランティア活動は悪天候のもとで始まり、不安は募るばかりだった。仕事の大半は草刈りだった。草刈りをしている間に、だんだんと震災当日の光景が浮かびあがってくる。それをかき消すようにして草を刈り、手は止めない。そして時々出てくる被災者の方々の思い出の品を見つけては、地震、津波に憎しみを感じた。溝の泥をかき出す仕事はとてもつらかった。8人がかりで行ってもなかなか進まない。しかし、とてもやりがいはあった。全く流れる気配のない溝を、流れるようになるまで修復できたことに、これ以上ないほど喜べた。家を失った方に話を聞いた。一番よい体験だったと思う。その方は悲しみに暮れ果てていた。そんな経験をしたにもかかわらず、生きようとする力強さは、涙を流される姿からさえメラメラと感じ取ることができた。あの姿は一生忘れることができない、というよりも、忘れてはいけないんだと思った。被災した全てを、家や、畑や、もちろん被災者の心をも、将来の自分らが、元の生活に戻れるように全力を尽くして修復に取り組んでいくしかない、強く感じた。

自分が、このボランティアを通じて出来たことは、ほんとうにちっぽけで、ボランティア前と後の景色はほとんど変わっていないのと同じだった。しかし、あれだけ短い今回のボランティア経験は、一生自分の心の中では在り続けるものであり、ある意味大きな傷となって残っていくと思う。これからの将来を生きていく自分にかかってくる責任を自覚するとともに、今の自分からの大事な課題としてこれらをこなすことにより、傷を癒し、ボランティアを行った意味があらわれてくるのではないかと思う。

東北のボランティアに行つて

県立西和清陵高等学校 3年 阿比留 優希

3月11日、今後忘れられることのないようなとても悲惨で恐ろしい地震、津波が起きました。毎日テレビのニュースで見ているばかりで、いつも「自分ができることはないのかな？」と思い、募金や節電、小さなことだけれど、自分ができることを自分なりに探し、行動していました。私の母が何度か現地へボランティアに行っていたので、いろいろな話を聞いて、私も現地に行つて力になりたいと思っていました。

学校の先生からボランティアに行かないかと誘われ、私は行つて東北の皆さんの笑顔を少しでも多くする力になりたい、現地に行つていろいろなことを感じたい、と思う反面、私なんかが行つても力になれないんじゃないか、迷惑かけたりしないか、ささいな発言で東北で被災された人たちが傷つくかもしれない…と不安にもなりました。けれど、同じ学校の友達も一緒だし、お互い支え合つて頑張ろうと思い、行く決心をしました。

東北に着いて、バスの中から見た気仙沼市と陸前高田市のとても悲惨なあの光景は今も忘れること

はありません。テレビで見ているのとは全然違って、自分の想像をはるかに超えていたので、ただただ呆然とバスの中から見つめることしかできませんでした。あたり一面何もなくて、津波に流されずに残った建物の骨組みや、片付けられた家の一部や家具などだけが、何もなくなってしまった土地に山積みになっていました。数百台はあろうかという車も並べられていました。私はそのような光景を目の当たりにして、本当にショックでした。ほんの数か月前まではここでたくさんの人が暮らし、たくさんの人の笑顔があったと想像したら胸が締め付けられました。もう言葉にならなかったです。

陸前高田市の、私たちが作業する場所に着いて田んぼの草抜きをしているときは、少しでも力になりたいと強く思っていたからか、ほとんど無心で黙々と作業に徹していました。2日目には家の周りの草抜きをしましたが、家の近くだったせいか、コップ、マジックペン、お茶碗、りんご、ぶどうなど、生活に関わるものが次々と出てきました。私が見つけたのではないけれど、近くのがれきの山の中に、ハム太郎のぬいぐるみがありました。ドロドロになっているそのぬいぐるみを見て、「小さい子の大切なぬいぐるみやったのかな」とか「このぬいぐるみの持ち主は無事やったのかな」とかたくさんの思いが込み上げてきました。本当に胸が苦しかったです。

この日は、家の中を見せてもらうことができたので、2階の部屋を見せてもらいました。2階に上がると、床から2メートルくらいのところ、水の跡が残っていました。とても衝撃を受けたし、そのときのことを考えると恐ろしくなりました。

2日間という短い期間で私はどれだけ力になれたのかな？と考えると、その力は微々たるものだったと思います。けれど、現地の人は「奈良の遠いところからわざわざありがとう」と言って下さいました。とてもうれしかったです。

東北の震災からもう半年経ちました。もう半年です。本当に時間が経つのは早いです。ニュースを見ている、あまり復興が進んでいるとは思えません。まだまだたくさんの人が仮設住宅や避難場所での厳しい生活を続けています。1日でも早く、半年前の生活になるように強く願っています。苦しくて辛くて明日が見えなくても、強く生きて前を見ている東北の皆さんに、笑顔になれることが一つでも多くなったらいいなと思います。

私はいつまでも、少しでも力になりたいと思っているので、これからも募金や節電など、小さなことでも、長く続けていきたいと思っています。そして、また機会があれば、現地に行って笑顔を届けられたらと思います。これからも一緒に頑張りたいです。

ボランティア活動を通して

県立高取国際高等学校 1年 森井 葉月

私は今年の3月11日に起きた東日本大震災の復興支援ボランティア活動に、8月21日～24日まで岩手県陸前高田市と宮城県気仙沼市へ行ってきました。私たちはバスで出発し、男子は陸前高田市、女子は気仙沼市に向かいました。でも、気仙沼市では雨がひどくなっていたので予定を変更し、女子も陸前高田市に向かうことになりました。ボランティアセンターに着くと、私たちと同じようにボランティア活動に参加するバスが行き来していました。その中には外国人の方々もいて、本当に嬉しく思いました。ボードにたくさんの依頼の紙が貼られている中で、センターの方より活動に際しての説明を受けました。その中で、「まだ見つからない遺体が出てくるときもあります。」と言う指示を聞き、内心では怖さもあり、またそんなことが本当にありえるのかという不思議な思いも大きかったです。なぜなら、私が訪れた日は、空は晴れてところどころ雲が出てはいましたが、私が住む奈良で過ごす平穏な1日と全然変わらなかったからです。地面には青々とした草がゆれていて、本当にこの下で今もなお見つからない人がいるのかと正直思いました。

私たちは手作業で草抜きをすることになりました。大事な物が埋まっていたとき、機械だと傷つけ

てしまう危険性が高いからだそうです。草抜きをしていると、土の中から服やズボン、カセットテープ、学校の教科書などがたくさん出てきました。本当に怖かったし、悲しくてただただ驚きました。そして、自分の目で見たことで地震や津波の恐ろしさを心から感じることができました。また、バスで移動する際に見た被災地の姿は、荒れた地に青々とした雑草が広がっていて、街があり人々が住んでいた頃の東北とはかなり変わった姿となっていました。

ほとんど建物が建っていないで、骨組みだけになった家の前や、何も無くなった荒れ地にお花が供えられていたりしました。他にも滅茶苦茶に壊れた車やタイヤがいくつも山積みになっていたり、海辺にあるはずの大きな船が陸に押し上げられたりしていました。被災された方の家族の人に話を伺ってみると、車で逃げる人や走って逃げる人がごちゃごちゃになり渋滞していると、後ろから大きな津波が押し寄せて、車や人、建物を海の方へ流したのだそうです。その姿を見て余計にパニックになり、中には家族を守るために車を進めてしまって、人をひいてしまった方もいるそうです。だから助かったとしても心に大きな傷を負い、それをどこに向けたらいいか分からず、今も苦しんでいるそうです。窮地になるとパニックになり、人が人でなくなるのかもしれないとおっしゃっていました。その話を聞くと、驚きと怖さでいっぱいになりました。やはりテレビや新聞で聞くのとは違う生の声がとても印象に残りました。

震災から5ヶ月も経っていたのに、まだまだ復興復旧にはほど遠かったです。でも阪神淡路大震災の時のように、みんなが力を合わせて一つ一つ一緒に乗り越えていくことができるのではないかと思います。私も募金とかしかできないけれど、これからも被災地の復興に協力していきたいと思っています。

震災地ボランティアに行つて～岩手県陸前高田市～

県立大淀高等学校 1年 大東 元

僕は8月21日から8月24日の第二団に参加することになりました。8月21日、集合場所の県庁前で両親と待っていました。そして出発式をして県庁前を出発した僕たちが向かった場所は、東日本大震災で被災し、津波の被害が大きかった岩手県陸前高田市です。テレビで見ていたあの光景を見ることができる、正直最初は少し軽い気持ちもありました。

しかし、陸前高田市へ到着すると、僕はもう言葉を失ってしまいました。僕が見た光景、それは、そこには元々家があったのか、と疑ってしまうほどでした。残っていた建造物は鉄筋コンクリート製の建物で、かつ大きな建物だけでした。それも、残っていたのは建物の骨組みのみ。他は地震と津波で破壊されたり流されたりしていました。また津波の高さを、被災した建物から見たところ、5階建てマンションの4階部分までの高さまで押し寄せていたのか、4階部分も残っているのは窓枠くらいで、後は流されたり、壊されたりしていました。僕は津波というものを知らなかったのですが、今回のボランティアに参加して、津波の怖さなどがよくわかりました。

そしてしばらくすると、今度はガレキの山が広がっていました。津波によって流された家の一部や、船までありました。

またしばらく走ると、僕たちの作業する現場へ到着し、説明を受け、作業を開始しました。僕は溝掃除でした。他の高校の先生方と共に泥かきをしました。

ヘドロ臭い水路の土を何分かかき出しているうちに、津波で流されてきた物品がいくつも出てきました。すると、今度は袋に包まれたものが何か出てきました。「何でしょうか、コレは…。」と先生にお聞きすると、先生は袋を開けてくれました。すると中から子ども用の服と思われる物が出てきました。それをきっかけに、泥の中から次々と服や座布団やテレビまで出てきました。僕は次々と出てくる物品を見つめて、何か複雑な気持ちになりました。